

CONVIVIA COLOR—1

ネパール残像

堀木一男

写真／対談 HORIKI Kazuo + OKANO Yuzo



ネパール残像

「豊かさの中の貧しさ」と「貧しさの中の豊かさ」が交差する

堀木 2008年、2009年とほぼ同時期の2月、3月に私と岡野さんは、相前後してネパールに行って来ました。山奥の子供達と絵を描くことで交流するというプログラムに参加したのだけれど、そちらの方はそれぞれ報告集にまとめました。

それぞれかなりの枚数の写真を撮ったわけだけれど、二人が別々に撮った写真をもう一度眺めてみました。ネパールを通過して何を感じたのか。僕の独断で、お気に入りの写真を選び、その写真を眺めながら感じたことを文章にしまとめてみようと思い立ちました。その小冊子は巻頭に二人でネパールについての対談をするところからはじめたいと願っていました。というわけでどうぞよろしくお願いします。

旅人が垣間見るもの

ところで岡野さんは、新婚旅行もネパールでしたよね。ネパールには以前から興味があったのですか。

岡野 単純に山に興味があり、新婚旅行とも重なってちょっと珍しい所ということで、相当事前の勉強もして行きました。

堀木 山登りの好きな人たちが、エベレストに憧れるというやつですか？

岡野 だけどエベレストに登山に行くわけじゃないから、ネパールの人々の暮らし、山の民の暮らしということが興味の中心でしたね。

堀木 僕は友人のKさんが定年退職後ネパールに行き、現地の女性に裁縫を教えるという潔い生活をしていることを知って、いつかネパールに行ってみたいと思っていました。アジアに関わるNGOの資料など読むと、バングラデシュやネパールはアジアで最も貧しい国として紹介されているんですね。行ってみて貧しいというより、風景の素晴らしさに目を奪われたという感じでした。

岡野 僕は都市部が汚れた感じの他は初めての時の印象と変わりませんでした。ただ初めて行った時は、空港に行く时必须「ワンルピー ブリーズ」と言われるし「100円ライター」ってねだられました。今回はなぜだかそれが全然なかった。

堀木 そういえばカトマンズの空港には、荷役の労働者が沢山いてあちこちで仕事をしていたが、金をせびるという感じがじゃなかったですね。僕が驚いたのは、聖地カトマンズの交通渋滞のすこさ、空気の汚染のひどさ、その中を悠然とヤギや牛が通過して行く光景です。

岡野 交通渋滞は前はそんなになかったです。以前と違うのは都市化がものすごく進んでいて、バイクや車の廃棄ガスがひどいのだけれど、ソウルの様なデザイン的な洗練を意味しない都市化ですね。ボロボロの車がただ集中してしまっただけという、かえて物的な質の貧しさを感じましたね。

堀木 アジアを旅してみても僕が思うのは、東京から離れて風俗の違う街を歩いているさなかに、ふと日常と非日常ということを感じるのかな。つまり旅は非日常の世界なわけけれど、旅先には別の時間、別の暮らしの日常が厳然としてあるという感じがな。どんなに物珍しく見える世界であっても、抜き差しならない生の現場があるみたいな感じなんだけども。岡野さんはその辺はどう？

岡野 僕らはあくまでも旅行者だから、通過していく人間ではあるけれど、それでも垣間見えるじゃないですか。上辺しか見てないのも事実ですが、ある種の真実の断面を感じることがありますよね。

先日読んだ本^{*1}で、明治になって外国から沢山の人がやってきましたが、彼らが本国に日本の印象を書き送っているんです。その手記の中に垣間見えるのは、江戸の文明の残照というものですね。彼らはまさに旅人だし、外国人だから、オリエンタリズムというフィルターがかかっていますが、一樣に日本人の暮らしが質素で明るく活き活きたものであり、ヨーロッパのどの国の人たちよりもずっと自由に感じると述べているんです。僕らの旅も明治期の外国人の目と同じではないかと思うんですよ。

初めてネパールに行った時の感想は、貧しいけれども、僕らよりずっと豊かに暮らしているし、幸せそうだなと感じました。人々の暮らしは、物も薬も衛生観

念もない所でしたが、それでも何世代にわたってずっと生きてきたわけだしそこにいろいろな知恵があってね…。

堀木 経済的には貧しいとしかいえないんだけど、何か豊かさを感じてしまうということですか。

岡野 豊かささえ感じてしまうというか、ちっとも貧しくないというか。印象的だったのは今回ナウリコット村で実業家のアルジュンさんが、あなたがた日本人からみて貧困とは何か？ 僕たちは貧乏に見えるか？ との問いかけでした。彼は、物は圧倒的にないけれど、その中で自分たちが誇りをもって、あるがままの中でひとつの幸せをつかんでいくのだといったかったのだと思いました。

一方都市の人間は、西洋的な文明の物の豊かさに憧れてそちらに傾斜してなだれをうっている面がある。ナウリコットに行った人の話で、去年は子ども達がお金ちょうだいと言わなかったのに、今年はそういうことをいいはじめていて言うって落胆している人がいました。

堀木 去年は確かにお金ちょうだいはなかったかなー。スイーツ ブリーズといってお菓子をねだった子がわずかにいたくらいでしたね。

自分たちが子どもだった頃の日本はまだ貧しかったですね。今は世界のトップクラスの富める国になっているわけけれど、豊かさの内実是非常に貧しいというのが分かりますよね。そういう意味では、このネパールに来ていろいろなものが見えるんだけど、たとえばネパールの自然、なにもない自然に僕は感動しちゃって、何で感動しているんだろうと思いました。その辺はどうですか。

岡野 なにもない自然でということ。ピュアな自然。原生林とかですか。

堀木 例えばカリガンダキ川の広大な河原、広大なスペースを見るだけで今までにない感銘を受けてしまったとか。それから目を上げるとアンナプルナ山系の8000m級の山並みが見えるとかかな。

岡野 そういう地勢的なことから言うとまず日本の規模とスケールが二桁違うというか距離感が違いますね。また前回ト

レッキングして歩いて、ちいसान山と村をいくつも越えて行くので気付くんだけれど、自然のままに非常に広大に見えている山川は、岡の頂上付近まで段々畑がこしらえられていて、実はかなり手が入っている自然なんです。

堀木 今回、ヘリコプターで移動してみて思ったのは、はじめはきれいな棚田だなと思って見ていたんだけど、いつまでたってもそれが続くので、次第にまずい、これだと自然破壊だと思いました。山は丸裸にされて必死に生活を支える貧しさが浮かび上がってきた感じでした。

でもそれとは別に、そのような手の中ですべての幸せをつかんでいくのだというように荒涼として広大な何も無いような景色は、初めて見るからかもしれないけれど心が大きく開かれるような感銘があるんですよね。

カメラを持っていると、多分感覚が何かに触れるとシャッターを押すんだと思うけど、景色に反応しますよね。

岡野 一つは高度。高度は大きいと思いますが。高い所に登ってみると分かりますけど、スケールが違うという感覚。以前日本の北アルプスの蝶ヶ岳から槍や穂高をみて、とんでもないスケール、ゾクゾクするスケール感を感じたことがあるんですけど、ヒマラヤに行くともう一桁違うという感じでしょうか。高度があって俯瞰して見ているというのは、ある種の神の目なんじゃないかな。そういう意味ではそこで生きている人々の世界観は、僕たちと一緒にだろうかと思うんです。

堀木 富士山にもかなり見通しの良い荒涼とした景色があるんだけど、ヒマラヤに比べるととても優しい感じですよ。

シャッターを押させるもの

堀木 気に入った写真を選んでみたんだけど。岡野さんの撮った写真ではカトマンズの雑踏が気に入りました。これを見て、写っている人と見ている自分がシクロして、逆に東京の雑踏を歩いている自分が見えたように思いました。

人々の職業を撮ったものも岡野さんの目を感じて面白いと思いました。



岡野 これはバクタプールですけど、世界遺産でありながら生活の場であるという所です。生活の場なので結構汚して使っていますよね。きれいなまま残そうとはしていない。まさにそこに生活がある感じです。

堀木 これを見て、商人たちがまだいきいき生きていけるという感じがいいですね。カトマンズにはインターネットカフェがかなりありましたけど、この商人たちの多分息子世代には、かなり価値観が変わってしまうんじゃないでしょうか。

ネパールという山また山の国だから、交通が非常に不便じゃないですか。だから守られてきた文化があるでしょ。ところが四駆が入ってきたりして…。

岡野 そうなんです。カトマンズからヘリで飛ぶと分かりますけど、道がもうついてますよね。岡の頂上までね。ジョンソム街道なんかでも四駆のトラックに乗せてもらって旅したわけだけれども、昔はロバや牛の隊商が岩塩などを積んで通っていた。それが今は車が取って代わっているわけですからね。

堀木 道が出来るということは、便利なんだけど様々な影響を受けやすくなる。僕はタイに行った時に感じたんだけど、道が出来てしまうと教育が入ってくるといんです。その国の底力を上げるために公の学校制度を作って国民の民度を上げたいというのは良く分かるし、子ども達に教育を施すのはとても大切なんですけれど、少数民族や貧しい農民は、教育費という現金収入を得るために出稼ぎに行かなくてはならない。山奥の子どもは山向こうの学校に通えないので寄宿舎のある学校に行かざるをえない。結局一家は離散状態になってしまうようなんです。

失われたものへの寂しさ

岡野 僕らが旅をした結果一様にいなく危惧がある。貧しい国という先入観をもって来てみたら、実は彼らの方が豊かそうであり、ひょっとすると自分たちより幸せそうに見えるという感じをいだいて、ただど一方で一抔の寂しさ、このま

ま行くところの良いものは失われてしまうなというのが分かるわけですよ。

そんな危惧も明治期に日本にやってきた外国人が、西洋化する日本をみて感じたことと同様ではないでしょうか。そうして寂しく思うわけですよ。でもその動きはおそらく止められないんですよ。

堀木 自分たちのいる場所からネパールに行く文明や文化の質みたいなものの違いとか、先に行っている感じ、それが必ずしも幸せじゃないということが分かっちゃうわけだね。だけど交流というのは多分止まらないですよ。その辺にみんな痛みを伴うんだろうけれど。

岡野 すぐにデザインなんかをきちんとしなければ、国際的な競争に勝てないという時代になることはわかっているんですけれどね。できれば、そっとそのままにしておきたいという感じですかね。

堀木 結局、弱肉強食の論理がいつも歴史では起きているから、そういう意味ではやはり、自力をつけて対等につきあえる民族にならなければいけないというのがあるでしょうね。

岡野 ネパールって物価が安いし例えば年収はいくらかと、アルジュンさんにきました。そうしたら、彼はここの人たちには年収などという考え方がないと。そういうこと考えて生きていないと半ば叱られて、ああそうかと。年収いくらという現金収入がなくても彼らは生きて来れたわけですよ。

堀木 だから市場経済のものさしとは違った、村落共同体の絆がしっかりしているからでしょうね。

岡野 夜になるとロッジの外からピーヒャラと笛や太鼓の音が聞こえてくるんですよ。テレビなどない彼らが、家族の団らんで食後に太鼓叩いて歌を歌って、笛を吹いて楽しんでいる様子なんですよ。

堀木 家族の団らんは日本になくなったように思いましたよね。みんなが好きな時に飯食って、好きな時に帰ってくるわけだから、一緒に集まってテレビをみることもだんだんなくなってきているでしょ。

岡野 僕らの生活には夜も昼もないわけ

だから…。やはり生活のリズムをひとつにあわせてね、みんなで生きているという感じがないとね。

自然が覚醒させる

堀木 この間星野道夫の本^{*2}を読んで感じたんだけど、彼は不思議な出会いでアラスカという広大な大自然とそこに住むエスキモーやインディアンや野生生物に向き合う生き方を選択するんだけど、先住民の生活はもともと土地所有がないし、生活手段は狩猟だから、居留地なんかに押し込められた彼らは生活を失い壊滅的な生活を余儀なくされたようです。アル中の人が増えたり、アメリカの公教育のためにかえって部族の言葉が次代に受け継がれなかったり辛酸をなめ尽すわけです。70年代のベトナム戦争の時には、エスキモーやインディアンは黒人とともに戦地に送られ約5万人が死んだらしい。それどころか帰還したそれらの先住民たちはその後15万人が精神を病んで自殺したそうです。紆余曲折があつて苦労したそれらの人々が、なんとか民族のアイデンティティーを取り戻そうとする姿は、地球規模で進行する環境問題への危機感とどこか通ずるようで、きわめて切迫した現代的な問題を感じましたね。

岡野 僕もついこの間読んだんですが、南米のヤノマミ族とかの先住民などの村を旅してまとめた写真集^{*3}なんです。ある先住民の活動家に同行し取材したもので、それは自分たちの文化を守るために、まず森をなくしてはだめだと。居留地に押し込められたインディアンの轍を踏まれないように自分たちの住むべき森の権利を確保しようと、沢山の部族を束ねてその意味を説いて回るという運動です。そういう運動が高まって結構希望のある話になっているようでした。

堀木 世界が同時不況になって、行き詰まり感がありますが、先住民の市場経済に頼らない生き方がむしろ新しく見えてくる。それぞれの人々が自然の恵みの中で生きてきたことの意味が、全く素晴らしいことであるというふうに見えてくる。それが今の時代の中でとても価値がある

ことだなという気がするんだよね。そういうことの意味が、だんだん伝わる世の中になってきたよね。今までは先住民の暮らしは文化的に劣るというか、未発達なというニュアンスだったけれど。

岡野 それで、つい先日ジェームス・キャメロン監督の「アバター」という映画を見たんですが、まさにそうということがテーマになっていました。資源が欲しいために、自分たちより劣っている所に行つて、地球から派遣されている人間がいわば先住民達を追っ払おうとするわけなんだけれど、人間の手先として送り込まれた者がいろんなことに気づいてしまつて、むしろ彼らを守りたいというふになるんです。

堀木 なるほど。結局自然と向き合うことによって、何かが覚醒するっていう感じがあるのかな。

岡野 そうなんです。そこで自然というのがひとつのネットワークになっていて、更新していくってわけです。もちろん図式的に描いているんだけど。こういうことを、メジャーな映画監督が取り上げる時代なんですよ。

堀木 ジェームス・キャメロンは時代を読む感覚に優れているからでしょうけど、今の時代の人間の未来像の歪みに気づいて製作してるんでしょうね。

岡野 完全になぞられて置き換えられて見ることが出来るように作っているんですよ。

堀木 世界の様々な少数民族の宗教は自然神的な傾向、アニミズムの呪術的世界だったと思うんですけど、否定的側面ではなくて、自然の恵みとしての植物や動物の命がダイレクトに自分たちに取り込まれ、自分たちの命そのものに変貌していることを本当の意味で知っている点において、我々よりもずっと深い自然に対する畏敬とか知を獲得してしているんじゃないかと思います。自然を通して本当にかけがえのないことは何かとか、そこに目が向くようになってきたという気がしますね。 ■



Photo: HORIKI Kazuo

古都パタンの王宮と寺院

旅人として かすったようにそこを通過しただけである
 この王宮でどのような物語があったのか知る由もない
 積み重なったほこりのにおい 精緻を極めた木造の建具や彫刻の重み
 緻密に敷き詰められ積み上げられた煉瓦の色
 街ごとがすっぽり時間という醸造所に抱かれたように
 琥珀色に沈殿しているたたずまいである

煉瓦と木造の建具の組み合わせは我々には珍しいが
 あきらかに西洋建築のそれとは違うネパールの宗教的造形であろう
 侘び寂び好みの日本人には落ち着く色調に違いないが
 ゆったりと腰掛けるネパールの落ち着いた振る舞いが
 かえっておごそかに流れる時間を感じさせる
 煮詰まったカトマンズの暮らしの混乱やいきづまりへの不安
 未来を展望する手だてを持たない庶民には
 伝統的な神々の物語が平安を与えるこの地こそ
 変わらぬ聖地であり希望なのかもしれない

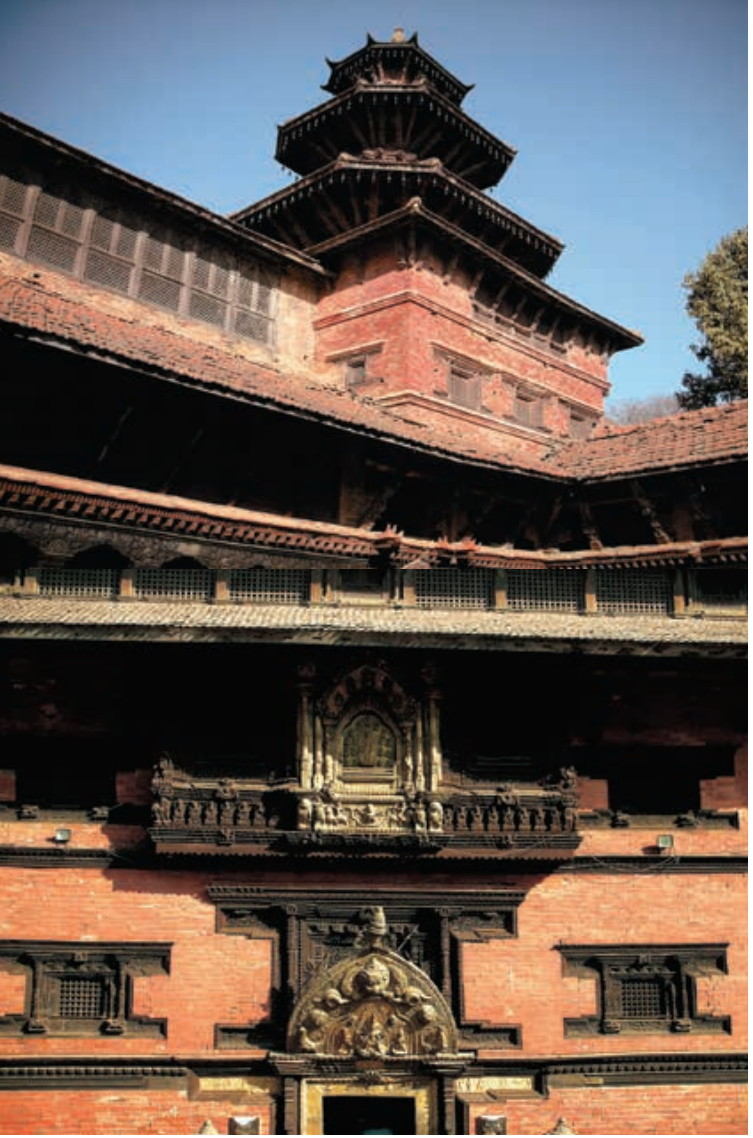




Photo: OKANO Yuzo

常

日常と非日常

いつもの暮らしを日常とすれば
 旅は非日常である
 カトマンズの雑踏にたってみると
 ああここにも人々の日常の暮らしがあると思う
 これは東京の雑踏の中にまぎれている時には
 感じない だから非日常の旅のさなかで
 日常の意味が見えたのである
 人種・風俗・文化の違いの中ではじめて
 ありふれた日常が浮かび上がったのである
 どこでも同じに見える人の流れは
 それぞれに行く先がある
 雑踏にまぎれて誰も気づかないが
 行く先には待っている人がいる
 家族であり友人であり恋人かもしれない
 関わる人が増えるほど日常の雑事は増えていく
 解決できることもできないことも
 毎日の様々な人の流れを作っていく
 われわれはこの流れの中で決断し
 自分になっていくのだ





八百屋
粉引き



肉屋
魚売り

仕事

生きていくということは
仕事をしていくことだ
われわれは仕事をして一人前になり
その労働の対価で暮らしを立てていく
その能力に劣るものはなかなか結婚が許されない
伝統的な社会では家業を継がせることが
当たり前であったわけだが
学校やインターネットが普及した世界では
子供達の目指すものは必ずしも
父親の価値観と一致するものではない
情報化の進捗がすすむほど変化が急激になる
その土地になじんだ暮らし方と
情報をもたらす富への先見性の乖離が
家族の生き方をめぐる混乱に
ますます拍車をかけていくだろう
カトマンズの街角にも教育塾や
インターネットカフェの看板が増えている
個人の裁量で仕事を切り盛りしていく
きわめて自立的である商いの世界が
いつまでも続いて欲しいと願うのだが…



Photo: OKANO Yuzo

カリガンダキ 広大な河原／牛のみち から車の道へ

ダウラギリ山とニルギリ山の間を流れる広大な川である
乾季には水平な数百メートル幅の河原が出現して
わたしは24人乗りの軍用ヘリコプターでこの河原に着陸した
標高およそ2500m ダウラギリは8000mを越え
ニルギリは6000mを越している
この広大な河原は標高の高い山里では道である
かつては牛やロバの背中に岩塩がくぐられ 通過する
隊商から通関税をとって この地域のタカリ族は巨万の富を
得たという 牛やロバが歩くたび響かせたベルの音は
まるで天女たちが遠くで奏でている音楽だ
村の道を歩いてみると 急勾配や狭い峠道など
石畳の道や泥の道等がとぎれとぎれに繋がった悪路である
人間や動物の足でしか進めなかった道なのである
しかしここ数年4駆車が出没して
生活物資が運ばれるようになりつつあるらしい
すこしずつ便利になればなるほど 文明の波が押し寄せ
村の生活は安心と便利さと引き換えに
間違いなく 貧しくてもものどかな生活が失われるだろう
子どもの学資のため現金収入を求めて一家が離散することもある
車の道が世界を変えてしまうのである

Photo: OKANO Yuzo

ツクチェ、マルファ 荒涼たる豊かさ



舗装道路はひとつもなかった 4駆でなければ走れない荒地である
かつてアフリカの難民キャンプで働いていた友人が 道路のへこみを
避けようとして車ごと路肩に落ち 横転して彼だけが亡くなった
そのときもし救急車が5分で到着していたら
助かっていたかも知れない もし日本なら
でもアジアやアフリカの道なき道の意味がわかれば
僕たちはきっと謙虚にならざるをえない 大きな落石があったり
倒木があったらまず通れない 別のルートは考えられない

通報する相手もないし助けもない
解決のめどがまずたないと思わねばならない
車が動き 目的地に達し宿につくこと それはまさに
神の祝福と感じなければならない
車の荷台でこぼこ道を尻に感じつつ ゲリラのように
マスクをして埃をよけながら 大型貨物として運ばれるのだ
この荒行に耐えて外に立つと途方もない荒涼が待っている
高く広く奥行きがある無尽蔵な荒涼が清々しい
寒さや厳しさが似合う荒涼の前で初めて
自分の小ささに安堵することができる

Photo: HORIKI Kazuo



Spirituality 自己の再生のために

印象的だったのは地方の名士一族の菩提寺である
ツクチェで見せてもらった寺は小ぶりながら寺の内部が
極彩色の神像がマンダラ風にびっしり描かれていたことだ
大きさといい 色といい壮観であった
宗教は建物を見たり芸術としてマンダラを見ても
リアリティは味わえない 地方の寺を建立した人々の
篤い思いが伝わらなければ理解できないだろう
Spiritualityは精神性であり 霊性であり 宗教性である
現代に失われているのは いわば困難に直面せず
体をかわしてばかりいるからだろう
病気 失業 離別など こころの痛みを味わうとき初めて
精神が目覚めてくるという 自分は何者か
人生の意味は？と 分析心理学の祖ユングは個人の
自己実現のプロセスをチベット仏教のマンダラの中に
見いだしたようである 錬金術が魂の精化であるように
男性性と女性性を併せ持つ人間の理想の姿が
マンダラの中心に描かれる合体神像なのであろう
我らは身体よりも思考を上位において思いを巡らしているが
全ての修行は思いよりも身体を鍛えることが上位だ
世界の混迷の中でやわな精神におさらばして
身体を磨くことで強靱な精神を獲得しよう

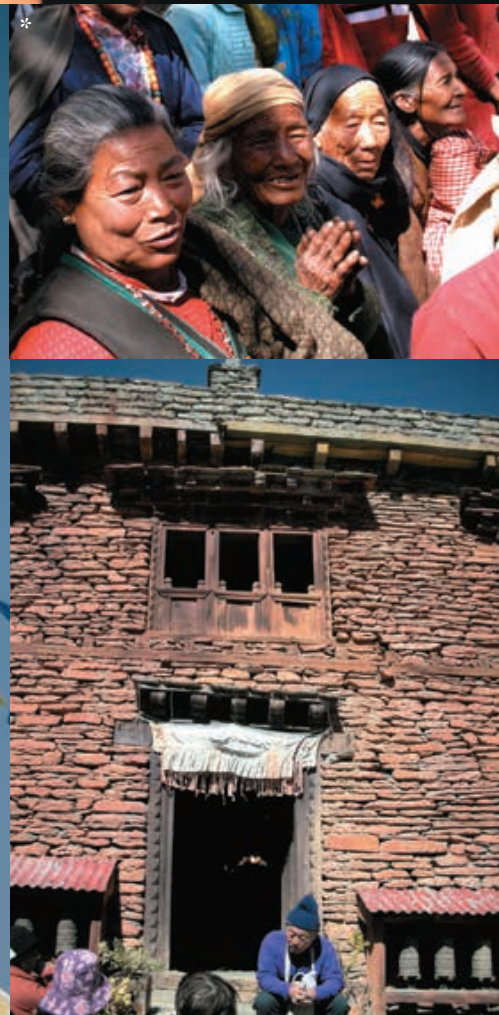
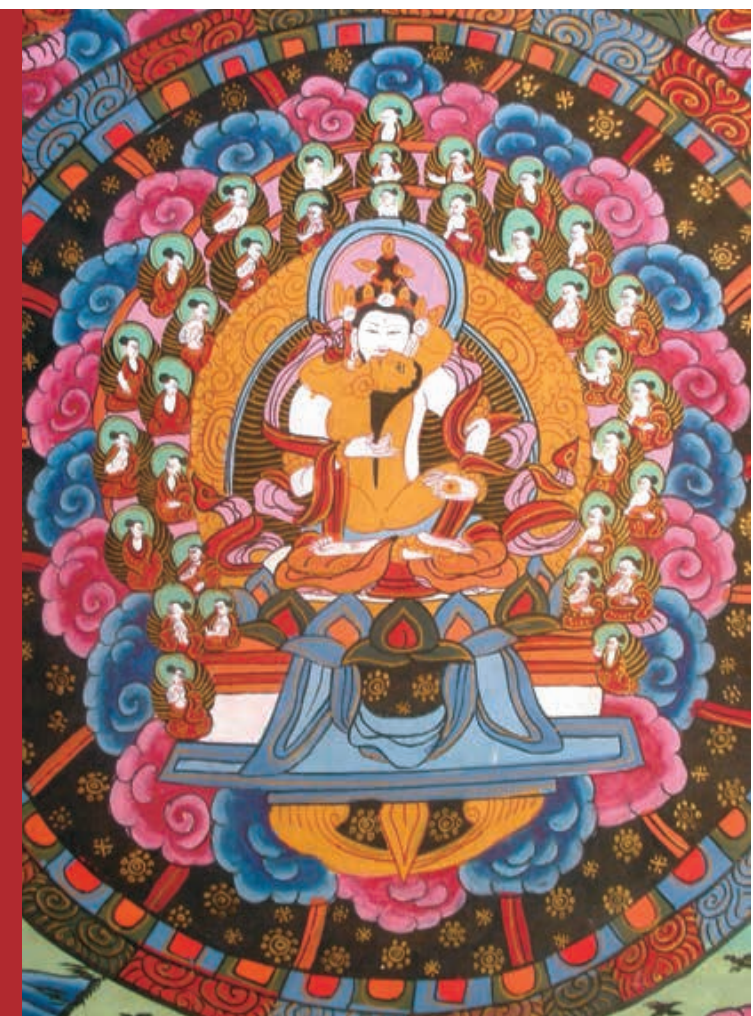


Photo: HORIKI Kazuo (*印のみ Photo: OKANO Yuzo)



Visual Communication Design Convivia

株式会社デザインコンビビア

162-0064

東京都新宿区市谷仲之町3-22

ワールドビル1F

phone: 03-3358-1455

Fax: 03-3358-1675

mail: mail@convivia.co.jp

www.convivia.co.jp